

♪エディットピアフ「アコーディオン弾き」その4(承前)♪

前回までに、主人公の街の女と恋人のアコーディオン弾きを紹介する1番のクープレ、官能的な音楽の喜びを歌い上げるルフランの歌詞をごらん頂きました。今回はいよいよドラマの幕が上がります(以下引用)

2番クープレ：

街の女は悲しく
向こうの街角に立つ
彼女のアコーディオン弾きは
兵隊になって行ってしまった
戦争から戻ってくれば
二人は所帯を持って
彼女はレジに立つ
彼氏は店主
なんて素晴らしい人生
トルコの御大尽のような暮らし
毎晩彼女のために
彼はジャヴァを奏でるだろう

2番ルフラン：

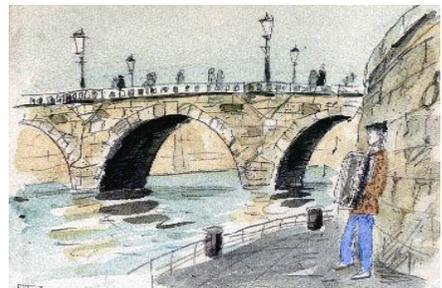
彼女にはジャヴァが聴こえる
自分が小さく小さく口ずさむジャヴァが
アコルデオニストを思い出す
彼女は恋する瞳で
力強いプレイから目を離せない
ステージの男のがさがさした長い指は
彼女に入ってくる 肌で知っている
下のほうを 上のほうを
歌い出したい
軀(からだ)で感じる
全身が張りつめる
呼吸が止まる
彼女は音楽に芯から身悶える (引用ここまで)

ルフランの歌詞は1番とほぼ同じですが、ここで彼女が聴いているアコーディオンは記憶の中の追憶のメロディーです。現実の音楽よりも夢想のほうが素晴らしいのかもしれない。

《ピアフの素晴らしさは語り尽くせません》

「アコーディオン弾き」は創唱者エディット・ピアフの第2次世界大戦前最大のヒット曲です。当時のSPレコードは画期的な売り上げを記録しました。最晩年まで彼女の重要なレパートリーであり続け、ニューヨーク・カーネギーホールでのライブ録音もありますが、戦後シングル盤として発表されたパリ・オランピア劇場のライブが素晴らしい名演です。シャンソンの世界では曲に命を吹き込んだ創唱者に敬意を払いつつも他の歌手のレパートリーを取り上げることも多いのですが、あまりにもピアフの歌が素晴らしいのでピアフ以外では聴くべき録音はほとんどありません。

ピアフにはシャンソンの魅力のすべてがあります。『うたかたの日々』の作者ボリス・ヴィアンが「電話帳を歌にしても皆を泣かせることができる」と評した劇的な歌唱はピアフ以前のシャンソン・フランセーズの集大成であり、ピアフ以降の音楽に尽きせぬ影響を与えています。ピアフについては昨年公開の伝記映画『愛の讃歌』や多くの書物があります。筆者のウェブサイト「ポップ・フランセーズ」(<http://lapopfrancaise.com/>)にも紹介とCD購入ガイドがありますので御参考になさってください。(続く)



絵 藤森悠二 作

1947年生 東京都出身

洋画家

「関東アコーディオン演奏交流会
2006アコーディオンのある風景」より
セーヌ河岸

◎画像の複写・転写を禁止します。